

看護学部における教育の回顧 その1 教養教育について

広島文化学園大学看護学部

岡田 浩 佑

■はじめに

平成21年4月から、呉大学は広島文化学園大学に名称を変更した。呉大学看護学部の学部設置10周年記念誌に、「看護学部学生に伝えたいこと」という一文を記した。A4判で1枚という制限つきであったので、看護学統合研究にやや詳細に記したいという思いが強くなってきた。私が看護学を学ぶ学生に直接医学その他の教育を始めたのが平成5年である。早や17年目を迎えるが、学生に接する機会はあと1年のみである。この間、学生には教科書のみでの授業ではなく、自分のフィルターを通して参考になると思う文章をコピーして配布し、有用な書物を紹介してきた。健康教育や医学教育について多く語りたこともあるが、今回は「教養のない者ほど教養について語りたがる」ということを充分承知の上で、教養について思いつくまを自由に書いてみたい。

■教養教育の現状

未来を拓く若者達は、一定の資格をもち世のため人のために活動できるようになることを目指して私達の看護学部に入學してくる。福沢諭吉が「学問のすすめ」でいう「独立自尊の人は自労自活の人」となり、また、一定の職業につき税をおさめて社会人として認められるようになることを、好きな看護を天職としてやり遂げてほしいものである。

教養について、広島大学医学部保健学科で健康科学・基礎看護学講座に籍を置いていたとき、「大学における教養教育はどうあるべきか」という課

題で、各学部から数名ずつが参加し、ホテルに1泊し2日間論じたことがあった。教養とはなにか。博学多識もよいが、人は生きてきた過程で、それぞれが身につけたやり方で自分の足で立って行けばよく、トルストイの「イワンの馬鹿」ではないが、「いいとも、いいとも」と言いつづける学問に縁がないものでもよいという意味で、「生きる力」と発言したところ、「医学部の教員はなんと教養のないことか」と、当時の副学長にいわれたことが今も耳の底に残っている。医学生時代を振り返ると、教養部や教養課程というのが2年間あり、この間には解剖学や生理学などの専門教育は全く受けることがなく、将来に備えてドイツ語、英語などの外国語や哲学などの授業があり、数学、化学、統計学などの科目のほかに、体育の授業でスケートその他自由に振舞うことができ、夏休みには肉体労働者に混じってアルバイトに精出すか、数少ない大学の図書を片端から読み漁るという生活であった。当時は、工学部、理学部、文学部その他どの学部の大学生も教養部あるいは教養課程の2年間を経て、専門課程はその後の2年間、医学部は4年間を過ごすということであった。教養部という言葉から、頭の片隅には教養を意識せざるをえなかった。

現在、看護を支える学問の柱には看護学を中心に、医学、社会学、人間学その他多くの柱があり、大学では専門学校教育とは異なり、同じ職業でも「occupational nurse」（「指示された通りの看護活動」）ではなく、「professional nurse」（「自分で判断し活動の範囲を拡大する必要がある看護活動」）を目指すならば、その判断力を鍛える土台

としての教養を常に考えざるをえない。

ヨーロッパでは、CultureやLiberal Artsといえば、卒業時に数名の教授陣を前に、社会、経済、哲学、宗教、芸術など、さまざまな分野の質問に自分の考えを述べることができるという一定の水準らしきものがあるという。ジャーナリストで、精力的な文筆活動を展開されている立花 隆氏は「東大生はバカになったか 知的亡国論+現代教養論」その他、教養教育の改革について多く論じている。立花 隆氏は教養について「メシの種にならないものを多く学んでおく」と述べ、その一方では、「現在の教養とは、英語を読み書き聞き話すことができ、コンピュータを使いこなすことができ、分子生物学のような最先端の学問の進歩も理解できること」と述べている。われわれの看護学部の会議室でも、文系や理系という区分けが真に必要なものか論じたこともあった。世にいう文系であれ、理系であれ、多くの大学で論じられているのは、現代の若者に漫画ばかりを見るのではなく、まともな読書をすすめるというのが、教養教育の共通点であろう。

東京大学の教養学部では、学生に対する読書のためのガイドブックを出版している。広島大学の教養部から発展してきた総合科学部では、教員が総力を結集して「新入大学生に薦める101冊の本」を作成して、これを多数にのぼる各学部の新入大学生に無料で配布するという話を聞いた。私が籍をおいた医学部保健学科の看護、理学療法、作業療法専攻の学生も例外ではない。この作成プロジェクトの代表者が、呉大学看護学部の生命倫理の講義を引き受けてくださった難波 紘二氏であり、本来は病理学者で私の広島大学時代の悪性リンパ腫研究会の仲間である。広島のごう百貨店の6階にある紀伊國屋の本売り場まで直接引っ張っていかれて教えられたこともあり、私も呉大学看護学部の新入生歓迎キャンプで配布した。果たして漫画ばかりではなく、大学人としての読書の習慣がつくかどうか定かではない。この文章を書いているときに、この改訂第2版が私達の図書館に入った。

利根川進氏が日本人として最初のノーベル医学生理学賞を受賞された後、立花 隆氏と連名で「精神と物質」という興味ある対談の記録を残している。立花 隆氏は東京大学でフランス哲学を学んだというが、生物学、免疫学、分子生物学などよく独学し、準備して対談に臨んでいることがわか

る。大学人といえる者は、特に教えてもらっていないことでも、自分で努力すればできる能力を有する。あらゆる領域で、大学卒業後に自分で学ぶことが多くなるが、大学時代にその基礎を築くことも大切であろう。「実践健康環境教育論」という授業科目の中で、日野原 重明氏が創設されたライフ・プランニング・センターから出版された書物をいくつか使用したが、その中の1冊の冒頭には、白人の若者がインディアンの老人に右に行くべきか左に行くべきかを問う場面があり、老人はそれにはなにも直接に応じない場面があった。「教育とは教えられる態度を捨てさせることから始まる」という文章が印象的であった。

しかし、看護学生には医学教育の合間に、輸血医療のイロハの考え方を徹底的に教えた。

患者さんの心理面の支援をすると同時に、人間が生物の一種であることを認識していないと、人はあっけなく死亡するものである。例えば血液型がO型の人に、わずか30ミリリットルのA型の赤血球が輸血されたら医療事故死することを教えた。生物には「Horror autotoxicus（自分を破滅させるものに対する恐れ）」という原則のあること、「免疫遺伝学の通則」の1つに、「正常な個体は自己にないものに対してのみ免疫反応（この場合は抗体の産生）をする」こと、忘れてはならないことはしっかりと記憶するように話している。

高等学校で生物学を履修していない学生も増加しているが、玉川大学出版部から、教員による「生物学を読む」という良いガイドブックがでており、生物学といってもたいへん広がりのある領域である。

英語が得意でない学生も多いが、日本人の英語には主語がないとよく注意される。「医の心」という医療倫理の数編の書物の中で、大学生に英語表現の質問をしてみたら、多くの学生がまちがった答えをしたという文章をみつけた。それは、バスに乗り合わせてある広場にさしかかった時、運転手に「ここはどこですか？」を英語でどういえば良いか、という質問である。多くの大学生は「Where is here?」としかいえないが、「Where are we passing now?」というのが正しいという。日本語では「富士山が見えた」という時に、「私が見えた」のか「誰が見えたのか」など主語がなくても問題ない。農村文化的背景があるためと解説してあり、そのようなことも関係するのかと納得したことがある。

普遍的な感想かどうかはわからないが、読書の有難味は、本に対する飢えや知識に対する飢えを感じるにより倍増する。私が小学4年の時に敗戦となり、その後の日本語教育は貸本屋から借り出す講談社の分厚い本が頼りとなった。幸いなことに、昔の大人の本には漢字にふりがながあり、そのために小学4年までの日本語教育でも吉川 英治の「宮本武蔵」,「三国志」や「太閤記」を読むことができた。朝鮮戦争がはじまり、中国の東北（旧満州）に抑留されていた日本人鉄道従事者は、西北の奥地、甘肅省天水（てんすい）に鉄道建設のため移動した。生まれ故郷の恵まれた近代的都市の大連とは全く異なる環境で、電気、水道、ガスなどなく、草鞋をはいてひたすら歩くという、日本でいえば毛利 元就時代のような生活をした。日本語の書物はなく、知識に飢えた時代をすごした。この貴重な体験が知識を習得することの大切さを知り、バイタリティを養う根源となっている。

すなわち、熱い太陽に焼かれた砂浜で、水をたればたちまち吸い取られるように、知識の習得には必要に迫られるとき、目標があるときが最良で、中国語や英語などの外国語会話はその典型的なものであると、自分自身の体験からいえる。

繰り返しになるが、以前の4年制の大学では、何学部でも専門教育の前に教養部時代というのがあった。看護師は医師よりもむしろ濃密に患者さんと接触する。高校を卒業するや、直ちに看護専門職者としての技術教育面に割く時間が多くなるが、4年間を通じて常に教養とは何か大学人として自問自答していかざるをえないであろう。人間学といえば、看護の原点であるフローレンス・ナイチンゲールの伝記や、環境教育で欠かすことのできないレイチェル・カーソンの「沈黙の春」 「センス・オブ・ワンダー」や、レイチェル・カーソンが「沈黙の春」を捧げるとしたアルベルト・シュヴァイツァーや、「ほほえみ」のマザー・テレサの伝記など、清水書院の「人と思想」百数十冊を図書館に置いた。果たして学生は読んでくれるであろうか。私達の医学生時代には、シュヴァイツァーの「生命への畏敬」を説いた「森と湖の間で」や、クローニンの書物など医療人として将来活動する者にはよく読まれたものである。最近では、患者さん自身が書き残した多くの読むべき本が多数残されている。

多くの恩師は講義の合間に雑談をすることが多

かった。黒板にさらさらと書かれたドイツ語「Nur ein guter Mensch kann ein guter Arzt sein (ただ良い人のみが良い医師たりうる)」や、アインシュタインの言葉で「Imagination is more important than knowledge (想像は知識よりも、もっと重要である)」などは、良く覚えており、折にふれ学生には伝えた。

私も恩師たちの真似をして、講義とは関係のないプリントを配布した。その中には、京都にある国際日本文化研究所の初代所長であった梅原 猛氏の「学問の楽しさ」がある。小学6年生を対象にした、「小学生への授業」という文庫本にある数名の研究者の授業ライブ記録である。梅原 猛氏は瀬戸内 寂聴氏や故遠藤 周作氏とともに3名で義姉弟の契りを結んだ仲という。ドイツの哲学者のニイチェが好きなのか、学問という時にはその言葉を良く引用している。「ラクダ・ライオン・赤ん坊」といって、それぞれ「忍耐・批判・創造」であるという。また、中学生を対象にした授業の記録である「仏教」という文庫本がある。近い将来、看護専門職者として、生老病死の四苦に直面し、それぞれの死生観をもたざるをえなくなるであろう。「道徳と宗教」のテーマについて、中学生でも真剣に討論している姿を知るのも参考になると思う。

■おわりに

教養とは何か。時代と共に常に論じかえされる課題であろう。それぞれが、さまざまな考えをぶつけ合ってきた、広島大学の教養に関して改革したつもりの教育課程は、知情意のバランスを考え、自然科学的、社会学的、あるいは芸術的など広く深く人間の営みを知るバランスを考えたつもりであったが、学生の評価は高くなかった。その中でただ一つ、少人数の学生が一人の教員を囲み自由に討論する「教養ゼミナール」のみが、学生の評価が高かった。ただ、最初の試みのあとの学生の自由意見のなかに、「教養教育には適さない教員がいる」というのがあった。今でも自分のことをいわれたのかと自問自答したことを思い出す。起承転結のない駄文になった。マッカーサーではないが、「老兵は死せず、ただ消え去るのみ」の現在の雑感を述べた。